

令和5年度 愛知医科大学大学院看護学研究科 海外研修報告書

氏名	看護学研究科 慢性看護学領域 白柳葵	研修先	ケース・ウェスタン・リザーブ大学
学年	1学年次生	研修期間	2024年3月16日～2024年3月25日
主な研修内容	ホスピス(David Simpson Hospice House)訪問 PhDクラスの授業への参加、自身の研究についてのプレゼンテーションと質疑応答 がんセンター(Seidman Cancer Center)見学、シャドウイング		
報告内容	<p>1 志望理由と研修での具体的な学びについて</p> <p>(1) 志望理由</p> <p>私は現在看護師として耳鼻咽喉科病棟で働いているため、頭頸部がん患者と関わる機会が多い。大学院の修士課程でも舌がん術後の患者に関する質的研究を行う予定であり、アメリカの最先端のがん看護について興味があったため、海外研修を希望した。海外研修に行くことにより、看護の分野の日本とは異なる考え方や価値観に触れて自身の看護の視野を広げ、今後の研究や看護実践に活かしたいと考えた。</p> <p>(2) 学んだこと</p> <p>アメリカは日本のように国民皆保険制度ではなく、ヘルスケアシステムは多様化している。アメリカでは入院期間は最小限・短期間であり、早期から在宅医療への移行がされ、在宅ケアが基本となっている。Seidman Cancer Centerでは、様々ながんの専門家により最新の治療や治験・研究などが行われており、短い入院期間であっても患者や家族に対して必要な指導が十分に行えるよう、ビデオやパンフレット等が使用されていた。治療費についての不安などがあれば専門のソーシャルワーカーへの相談も可能で、患者・家族への教育体制も充実しており、早期退院となっても問題ないようなシステムがしっかりと構築されていることがわかった。がんセンター看護師のシャドウイング時も、他スタッフと連絡をとりあって治療方針を確認しながら、パンフレットを用いた患者指導を行っているところを見学することができた。不穏患者の病室には病院ボランティアが配置され、患者の見守りをしてもらうことで身体拘束が不要となっており、がんセンターでの患者への倫理的配慮についても学ぶことができた。</p> <p>また、アメリカの在宅ケアを支える存在として、ナースプラクティショナー(NP)が大きな役割を果たしていることも学ぶことができた。アメリカのNPは日本よりも与えられた権限が多く、開業して診察や薬の処方を行うことも可能である。これだけだと医師と同じような役割を果たしているようにみえるが、ホスピスの看護師はNPについて「医師とはフィロソフィー(哲学)が違う」と表現されており、強く印象に残った。医師とは異なり看護の視点をもって患者と接することができるNPの存在は重要であり、患者のQOLに与える影響は大きいということがわかった。ホスピスの看護師は、何よりも患者のQOLを大切にしており、「患者の人生の1番大切な瞬間に立ちあえることは名誉なこと」と表現されていた。アメリカでは在宅ケアが基本のため、ホスピスは利用条件に当たる限られた患者が入所されるとのことであったが、療養場所がどこであっても、看護師、ソーシャルワーカー、セラピスト、ボランティア等の多職種が協働して、死に向かう患者の希望をできるだけ叶えられるようにサポートする体制が整えられていることがわかった。</p>		